

「漫才」か、「絵画」か。
それが問題であった頃

「天は二物を与えず」と言う。人の立場でこの言葉を考えてとき、それは一芸に秀でようとするならば、己の進む道をひとつに決めよ、という自戒にも思える。当代随一の喜劇役者、芦屋小雁はその道を「喜劇道」と定めた。だが長い芸歴を越えた者に、天は初めてふたつ目の才能を許した。

父は友禅の職人。幼い頃から画を描くことが好きだった。「ん、あ、僕は絵が好きだ」とハッキリ思っはいいなかった気がするけどねえ。ただ、しょっちゅう（友禅の文様を描いている父の仕事を）見てます

の友人には「お芝居や映画の役者さんもいたと思うんですけどねえ」。だが薦められたのは、漫才師だった。

「三味線を弾いたり、尺八を吹いたり、琵琶を鳴らしたりという、父の多芸な遊びがあったわけですよ」。音に聞く「旦那衆の遊び」というヤツも、実際にそれを見てきた人の口で説明されると、グツと迫るものがある。「そう、旦那衆の遊びね。その多様な遊びを憶えた中でね、いろいろの世界の『漫才』というものに興味があったんじゃないかな」。ここで言う「いろいろのもの」という言葉も、いっそ「漫才」という言葉も、全て現在使われている言葉とイコールで結ぶのは適当ではないだろう。

本立て、三本立てで上映していた。イの一番で話題の作品は観られないが、二番館以下の方がお得であり、小雁さんが育ったこの実家は、どちらか選べる距離にあった。「でも僕はなるべく一番館で観る方やったねえ。はっはっは」。それは昔々の、ちっぽけなブライドだったかもしれない。その頃の思い出に、照れたように、でも誇らしげに笑う。「もっとうんと小さい時は近所の映画館で観てましたけどね。京都でもだいたい町内に一軒は映画館があったから。初期に観た映画は何やったかなあ。アメリカ映画なら『アメリカ交響楽』。音楽がガーシュインの作品ですね。それから、何やらなあ。ぎょうさんありますよ（笑）。アメリカでは戦

小芦雁屋

芦屋 小雁 あしや・こがん

’33年、京都市生まれ。本文中にあるように、幼少の頃から画を好み、商業美術の道を志すが、芸能界へ。’50年頃より京都・大阪を中心に兄・芦屋雁之助と寄席劇場に出演。テレビ放映が始まると、時を同じくして大阪に拠点を移し、伝説の喜劇番組「番頭はんと丁稚どん」など、週10本を越えるレギュラー番組を抱える人気を博す。’59年、兄や当時の仲間たちと劇団「笑いの王国」を結成。’64年には弟・雁平を加えて「喜劇座」を結成。以来、現在まで舞台・テレビ・ラジオなどで幅広く活躍中。書籍の執筆、写真や書画などの創作活動もこなし、平成17年からは亡くなった兄・雁之助の遺志を継ぎ、「裸の大将」を舞台にて好演、話題を呼んでいる。趣味は機械いじりで、休日には自宅でカメラ磨きばかりしているとか。



からね」。自然と小学校の頃には描いていた。何を描いたとか、明確な記憶はない。強烈な記憶はひとつだけ。「学校で他の授業中に描いていて、怒られた。なんべんも(笑)」。

記憶をたぐるにつれ、小雁さんのテンションが上がり始める。「甲冑に身を包み、馬にまたがる楠木正成公に鞍馬天狗、丹下左膳、あと当時はやっぱり、本を見ても戦艦や戦車というのが多かったですからね」。現存はないが、鉛筆一本で描き上げた線の多い画の数々。

終戦時は12〜13歳。その頃には焼け跡の画を描いていた。戦禍を免れた京都であるし、なおかつテレビ報道などあるはずもないから、想像で描いたものだった。少年が描く画のモチーフとしては「ぶんしゅうル」だが、そんな時代だ。

その焼け野原の風景を、当時ご実家にと宿していた美大生に絶賛された。「『譲って欲しい』と。で、あげました。それは鉛筆じゃなくて、水彩絵の具だったと思う」。美大生に「欲しい」と言わせる、小学生の画。恐るべきポテンシャルである。「その後は、『ああ、この子可愛いなあ』と思う女の子のために描いてね。それをあげた憶えは多いですよ。異性に対するそんな飛び道具を持つっている少年はまわりには皆無だった。「いなかったねえ(笑)。一番上の兄貴も上手かったと思うし、雁の助も一応に画は好きだったと思いますけどね」。

「巨那衆の遊び」が、人生に岐路を与えた。

悲しいかな、小雁さんにごく自然に「画を描く」という環境を与えた、当のご実家の稼業は終戦とほぼ時を同じくして物資不足から廃業。そこでお父様が薦めた職場が、芸能界だった。まず当時の芸能界と、ともすればその辺に業界入りのチャンスが転がっているような、現在のそれとは全く異なるものであることを把握しておきたい。喜劇や芝居、銀幕の世界は特別なものであった。

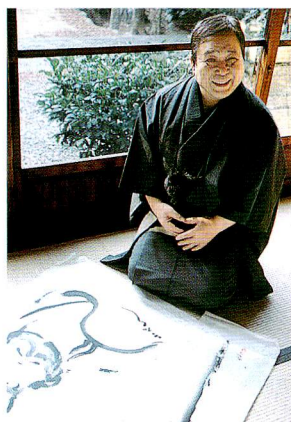
確かに当時の京都には、劇場もあれば映画の撮影所にも事欠かなかった。「お父様

「音曲漫才とか、三味線を弾ける人とかがいっぱいいて、踊れる人が良いとか。普通のしゃべり漫才というのはあまり流行ってなかったですからね。まあエンタツアチャコさんとかはいらっしゃいましたけどね」。

既に兄・雁之助はその道に進んでいた。実際に兄を追うように芸能の世界に入るのが、ところがそれだけでは済まなかったのが小雁さんなのである。

多才ゆえの葛藤がある。だが道はひとつと心得た。

「実は(芸能界には)行きたくなかった(笑)。やっぱり画が好きでね。美術専門学校出身だと嘘までついてデパートの内装外装を手掛ける仕事をしたり、京極には映画館も多かったし、映画の看板を専門に描いてはるところがあつて、お手伝いしながら仕事として画を習っていたんです。当時の京極には映画館や劇場が建ち並び、花月劇場もあつた。それぞれの劇場に掲げられた看板の数々。描かれていたのは各界の花形たちだったことだろう。「憧れてましたねえ。だがその憧れは、看板に『描かれる』ことではなく、看板に『描く』ことだった。「子供の頃から映画も好きだったし、看板も好きやった。もう映画館というのには最も憧れてましたね。ちよっとおませやうたからね。日本映画よりも洋画が好きやったように思いますね。戦後はイタリア映画やフランス映画が流行ったし、アメリカ映画も観たし」。当時、新作映画が封切られる映画館を一番館と呼んだ。時期をずらして、街なかから少し離れた二番館や三番館で、一番館で上映が終わったメイン作品を二



前に公開されたものと『キングコング』なんかもそうやね。『フランケンシュタイン』とか、ものすごい強烈な印象が残ってますね。おませや言うても子供やからね(笑)。特撮ものが好きやったかな」。

兄・雁之助と初めてコンビを組んで漫才を始め、1年ほどは、芸能と画と、二足のわらじを履きこなしたが、「これではイカン」と思い至ったところがキモである。文頭の言葉ではないが、一流を目指すなら秀でる芸はひとつにするべきだ。そんな思いがあつたか無かつたか、小雁さんは潔く絵筆を置いた。たまに描いた画も人にプレゼントする用で、当時の画は全くと言っていいほど残っていない。喜劇人としてのその後の活躍については、多くの説明は要らないだろう。

原点復帰か、新たな挑戦か。少年・芦屋小雁の筆致とは？

「またいつべん、やってみようかなあと思つてね。だがその喜劇人が、改めて画を描き始めた。「鈍つても腕を、もっかい引き起こしてみよかな、と。癒される画を描きたいと思うようになって、だから子供を中心に、したもので、小さな動物を中心にしたもの、そんな画を描きたいと思う。それとは逆にバアーンと大きいものを描いてみたいと思う。ミクロとマクロの両極をやってみてみたいと思つてねえ」。

ここ1〜2年を中心に5年ほど前から描きためた作品は、一気に100点ほどを数えた。数十年ぶりに手にした絵筆。その一筆目は「ああ、もうアカンアカン(笑)。中には墨絵のようなものもあり、児童書の挿し絵のようなものもある。「映画の看板を描いた頃は、主にスタアの似顔絵ですからね。今でもそういうのは好きなんですけどね。だからというて、そればかり描いてもナンやし、他の勉強もしたいなあと思つてね。ほとんど我流ですけどね」。

敢えて「ご本業」と呼ばせていただく喜劇の方も、「お芝居はお芝居でね、これからは新しいモンばっかりじゃなしに、古典喜劇みたいなものも、大切に残していかなアカンな

あ、という気もしますな。それを若い人たちがどう選択していくか。むしろ選択できるように。それを学校や劇団というではなしに、みんなと研究し合いたいなあ。昔の喜劇というのは笑いも涙、ベアソスがあつたもので、関西のものは特にそうやうたからね。それが最近はずっと少ない。それは現代の物語のつくり方では出来にくいのかもかもしれないしね。やっぱり昔の臨場的な、気張りのある物語の方がベアソスをつくりやすいのかもしれないしね。でも、今現在でも、つくりうと思えば違ったものができるかもしれない。やっぱり『泣き笑い』で終わるのが人間には一番ええんですね。それをお客さんに喜んでもらいたい」。

何十年ぶりに二足のわらじを履きこなそうと思いついた直接原因は解らない。だが二足のわらじは、長い研鑽と努力の歴史を積んだ者に、天が与えしふたつ目のプレゼントではないか。昔取った杵柄を改めて握りしめる。それは天が与え、そして自らが磨いた筆致であり、また新たな挑戦でもある。

「大人」「子供」という相対的な概念に、年齢という絶対的な基準は意味を成さない。年齢70歳を越えた、新生・小雁少年の筆は、それ自身が「思い出」であるかのように、今日も自由に走る。昨年から兄の代表作「裸の大將」を引き継ぎ、永遠の少年であり、稀代の画家であつた山下清画伯を舞台で演じている。これもまた「画」と「少年」を繋ぐ、浅からぬ縁であると思えてならない。



日時：平成18年3月12日(日)〜21日(火)春分の日
11:00〜20:00

入場料：500円(小学生まで250円)

場所：「月真院」京都市東山区下河原町ねねの道

「思ひ出」

芦屋小雁 個展
昭和の懐かしきこどもの遊びの世界



文中にある小雁さんの作品およそ50点を集めた個展が今月開催される。その案内の中に、「ボクの絵を見て、『よく兄弟や近所の友達と暗くなるまで遊んだなあ、夕飯の時に泥だらけで帰ってはお母さんやお父さんに怒られたなあ』とか、誰しもが持つ小さな記憶を呼び起こしてもらえるのいいではないでしょうか。ほのぼのとした昭和の良き日を、遊び絵を通して思い出してもらえれば幸いです…」と述べている。憧憬溢れる個展になる予定。

協力：(有)小雁倶楽部
問い合わせ：075-411-3456 小雁倶楽部内